

【氏名】木下 なつき

【所属大学院】（助成決定時）北海道大学大学院経済学研究科

【研究題目】

マルチエスニズムとローカル・アイデンティティ

ー20世紀後半の南カリフォルニア地域コミュニティ再建における多民族の地域連帯の形成

【研究の目的】

従来人種・エスニック・マイノリティには国家システムの中でヒエラルキー的に与えられた「人種・エスニック・アイデンティティ」が自然的なものと考えられてきた。しかしながら20世紀後半には多民族型居住区が増加、多民族的な帰属意識が地域社会という基盤の下で新たに形成し始めている。エスニック集団間、エスニシティ内部の多様なグループ（世代別・ジェンダー・職業等）、ホスト社会とエスニック集団などが、コミュニティ再開発、経済再構築をめぐり、これまで以上に多面的な関係を形成した。単に対立・排斥・抑圧という関係ではなく、共生・共存、合意形成といった局面も現れ始めている。「地域社会」に視点をおき、多民族が個々の「人種・エスニック・アイデンティティ」に同一化していく過程ではなく、経済・社会再建期の中で「ローカル・アイデンティティ」の形成過程をみる。それによって、多民族社会において文化がいかに変容し、また新たに生成するのかを考察する。

【研究の内容・方法】

マルチエスニックが共存し、ローカル・アイデンティティを深めていった事例研究として、20世紀後半の南カリフォルニアにおける、特に戦後のコミュニティ再開発の舞台となったロサンゼルス都心部を題材にした。ロサンゼルス都心部は20世紀初頭に形成され、軽工業を中心とする工業地帯であり、またおそらく当時世界で最も「マルチエスニック」とも言うべき移民労働者の集住する地区であった。第二次世界大戦および1950年代にかけて人種・民族ごとに分裂した居住区へと淘汰されていったが、1960年代以降再び「マルチエスニック」な居住状況が生まれていたのである。日系、中華系、韓国系、フィリピン系といったアジア系から、メキシコ系・中南米系というヒスパニック系、さらに黒人や白人などがロサンゼルス都心部に混合居住区を形成していたが、彼らには貧困と孤独な境遇という共通点があった。そのような状況に追い打ちをかけるかのようにコミュニティ再開発計画による立ち退き強制が行われたのである。

本研究では1960年代からのリトル東京再開発計画の経緯を軸に、強制立ち退きに対しての反対運動を、従来の研究で言われていたような日系アメリカ人の反対運動のみならず、広範な人種・エスニックの連帯によって行われたことを明らかにした。一連の騒動は強制立ち退きという住宅問題だけでなく、居住者の大半が第二次世界大戦を経て、経済的・社

会的に取り残された層であること、また、そのような中で彼らが自らの人種・エスニック集団内のコミュニティ組織による相互扶助よりも、ローカルな組織を形成し、連帯への試みを行っていたことは注目に値する。それは現在までもつながっており、ロサンゼルス都心部において、マルチエスニックな社会福祉などのコミュニティ活動の試みは既に長い歴史を持ち、人種・エスニック集団別の歴史だけではない共生の「歴史」があることを我々に示しているのである。